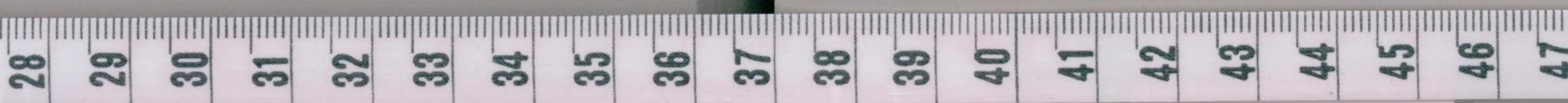
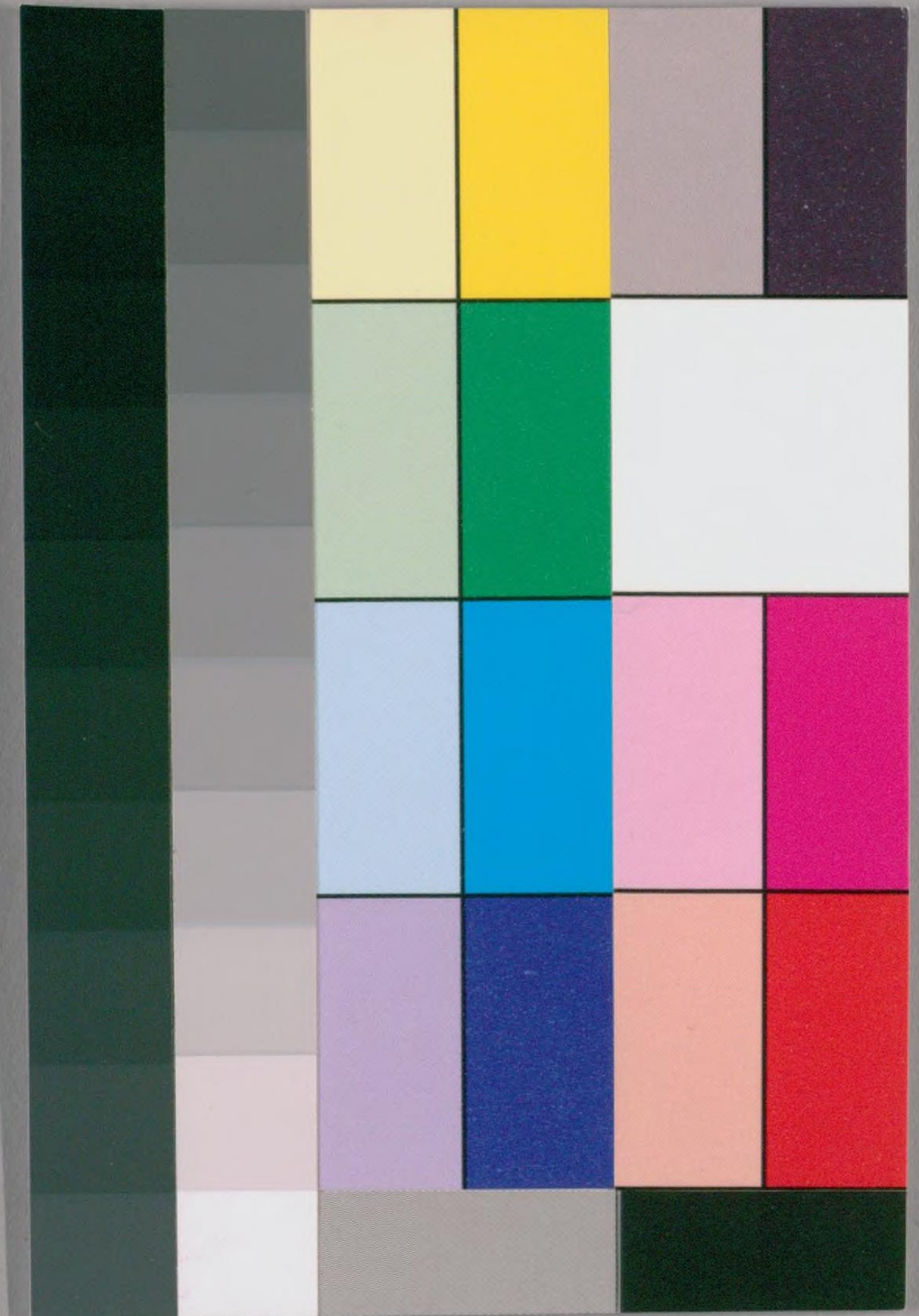


救荒便覽後集上

7  
34  
690



国立国会図書館

タイトル『救荒便覽』 請求記号 特7-690

ガラス使用

# 救荒便覽

後集上者其不足と補ひ給ひ多幸と云

此編ハ前篇の遺漏ヲ補ふ飢歲

白鶴義齋藏板

○救荒古典名數必讀

○周禮十二荒政○救荒全法六十條○放賑三策○林希元荒政  
 叢言疏救荒二難。二便。六急。三權。六禁。三戒。○周孔教撫蘇事宜。六  
 先。八宜。四權。五禁。三戒。飢有三等。○勸農書十四土。○清魏禧救荒  
 策。先事之策八。當事之策二十。有八。事後之策三。○陳芳生先憂集。  
 社倉三害。○蔡懋德招來高米八議。富公安流法。○張司農救荒十  
 二議等。通按むらふられ救荒事例名數の大畧あり若夫有志之  
 士潤澤せん事ハ皇國の古例を採擇して猶周禮荒政。○大學



衍義補○荒政要覽○救荒活民書○康濟録○荒政輯要○資治  
新書○錢穀備要○福惠全書等其他救荒論及せるもの其要  
領を摘んで胸臆不銘して事不處さる及んでハ人情を察し事  
宜辨へ深く謀り遠く慮りて自ら一軌軸を出れば機の  
そと變小應し運用の妙を得事宜を失はざるハ其人に存せら  
る

明君賢臣の言行舉ていさめとん

○崇神天皇の五年天下饑疫盜起るれば 天皇大に懼給ひ

御序………羣神を祭り庶民に賑給ふより疫や穀を  
のり群盜も悉く平き………天皇謹慎をまじく神祇を  
崇び重し給ひ………風雨順年穀豊く小家ごとく給り人ごと  
く足りて天下称………御肇國天皇とあがめらる………其後  
垂仁天皇の三十五年饑を詔して諸國のくらみ發き貧民をに  
ぎ………諸國に池を………農を勧め給ふ又 仁徳天皇の十年  
人民の困窮を………給ひ宮垣のやぐれも修め………屋根よりて  
も………給ひず御省略あり………五穀豊くに百姓さうえと

とゞぞ民のうゑを救ひ給ふハ人君御身の御らんや第一  
よて兼てより農業御世話ありて御自身藉田むかひに耕へたまひ  
五穀を貴たか蓄たくわへ給はば程の飢歳も志のくべき事  
あん 御代々天皇の御行跡ありて也歴史れきしに見てあるべし今  
其そのを志する人のと○北條泰時朝臣天下ノ政ヲ司ラレシ  
時寛喜元年ニ天下飢饉ノアリシニ借書かきヲ調へ判形ヲ加へテ  
富祐とくノ者ノ米ヲ借ルニ泰時法ヲ被置ケルハ来年世立直ラバ  
本物計もとヲ借リ主ニ可返納かへ利分ハ我添テ返スベシト被定テ面  
面ノ状ヲ被取置ケリ所領ヲモ持タル人ニハ約束ノ本物ヲ還  
サセ自我方添利分つぎニ返し遣サレケリ貧者ニハ皆免メ我領  
内ノ米ニテゾ主ニハ慥ニ被返ケル左様ノ年ハ家中ニ每事行  
儉約けんやく一切ノ質物共モ古キ物ヲ用フ衣裳モ新キヲバ不着きざ烏帽  
子ヲダニ古キヲツクロハセテ著シ給フ夜ハ燈あかりナク晝ハ一食  
ヲ止メ酒宴遊覽しゆえんノ儀ナクメ此費つひえヲ補給ケリ○武埜燭談  
東照大祖とうしょうの仰おほしは百姓のくもくも一粒百行とて去年の秋より  
種たねとり様々の苦くるしみをあり今年ことしの秋ハ稻いねとあり是こゝろを列ならせ

をさき穀を引米と句、主將不奉り諸人をすくふ百姓のくる  
しみ血の泪を流し事ぞう、聖徳太子の御言葉、民の苦みす  
る汗ハ皆血の泪ありとぞ、深くも深き時出る所ハ皆血は志  
かり出す心なりと聞召あきたり此故、了て君子ハ一飯を食  
まら内小民百行の艱苦を知るとあむいえ、至然るふ地頭代官  
あど民は多くたげて富を貪ると君子のしむ所天の悪は深し  
○地理落穂集、問云當 御代不成り川頃いづの事不候哉江戸町  
中米直段ねだん俄ふ高直にちり候を以新乞食杯も多く出来飢死の

者も有之とると申傳候き、ん沙汰の儀ハ、いり、取扱御聞候  
や答言我等承及候ハ 大猷院様御代御當地の米問屋仲間の  
者中買の町人共と心を合夥しく米の致買置其上諸方より入  
船を押候を以町中の米直段俄ふ上り候に付御吟味を強く  
被 仰付候へバ懇く相志れ問屋中買致同意候者杯も有之是  
又御仕置に被 仰付夫より米穀の直段も下り世間ゆりやう  
不罷成候と也右之心ある故飢饉と申ハ皆以て悪黨ど人の仕  
業もて天災のまゝんと申をのめてハ無之候と也同く問言天

災のききんと有之ハいふある事をさして申するものにて候  
や答言天災のききんと有之儀を古来より申傳へたる由こそ  
我等の承り及候ハ日本六十六ヶ國大中小の國々有之候を押  
あらし何十万石づの國六十六ヶ國といひ其十分の一の  
國數の高程皆損致しと相見へ候年の翌年ハ春中より  
麥作の出来候までの間三四ヶ月程ハ必ききん仕るもの由  
也然れ共左様ある凶年と有之儀ハ古今より稀成事候と  
也殊更 御當代のごとく天下御一統の御時代ハ於てハたと  
ひ天災のききん年と有之候て公儀の御威光を以御救ひ  
可被遊と有之ハ於てハ上の思召次第と申すもの候就夫天  
正年中の事杯みて有之候や五畿内大ニ不作仕り米穀の直段  
高直に成候を輕き者共ハ飢及び新乞食あとも餘多出来候  
へ共米穀拂底の時節故人の救ひ施しも無之ハ付道路ハ伏倒  
て相果候者も限り無之と有儀を豊臣秀吉公聞給ひて殊之外  
苦勞ハ被致俄小加茂川桂川等の堤普請を被申付候土沙を持  
運候程の輩らハ鳥目をめて被申候を以ききんの難を遁れ

候と也右秀吉公此儀ハ如形あり才智の人まで天下統一統の時節も無之に付諸國の米穀運送の下知仕置に於てハ力不及び不申故無是非手前の物入まで飢饉を救ひ被申候と也御當代の儀ハ北國筋をめぐり出羽奥州辺の米穀よりと海路の無滞諸國被致運送自由の足り候とある儀ハこれ偏に東照大權現様の御神徳を以天下御一統の御大功を御立置被遊候を以の御事也去に依て慶長五年庚子以来頓て百三十年に及び候へども大ききんハ無之と有ハ廻米運送の自由成を以の儀也爰を以て考へ候へバ如何成天地の災難有之候て人の一和と申との懸合不申道理も可有之哉と存る事不候なり同く問曰諸國小於て當作の出来不出来に依て来春のきくんと考知と有之儀尤左様可有之事に候へ共日本國と申も廣大ある事候へバ委細ハ知兼可申哉と被存候答云其儀ハ慶長年中權現様御代に成被仰出候と向後の儀ハ御領私領に不限或ハ旱損風損又ハ出水かどて田畑損毛米穀亦減の次第を委細に言上可仕旨被仰出候を以只今



に至り國主方又ハ御代官衆中より書付を以 公儀の御勘定  
所へ御訃被申上候御作法ニ候へバ明細ニ相知申事ニ候を以  
公儀より其御手當を被遊候ニ付万一古来より申傳へ候如く  
成天災のまゝん年おど廻り來候とても万民其災難ニ逢く死  
亡仕ごとくある儀としてハ決して有之間敷様ニ被存候也東遷  
成基論之曰夫四民之業雖殊唯商賈以利為利者也故當其乘時  
射貨機變百出殆如神堯禹所不能與鬪智計然所不能與爭利也  
是以管仲之治齊國也無與民爭利輕重貨物而低昂其價也然後  
利權歸上於是雖富商大賈不得牟其利朝士農工無失其利豈不  
善哉蓋此章答文云我博桑州大小國地里之數分均之其一盡不  
登則來歲必饑饉是其然乎余雖未聞其詳古人之言必有足徵也  
士之進取而任經濟者不可不察者也此文巧あむむとしくども  
商賈利權をとるの弊を抑る實小時務の切當なり採て以同志  
の人ニ示以〇元祿九年因國用不足初稅酒家由是酤酒增原價  
之半酒家皆私釀以占其利十二年八月辛夷夜大風拔木發屋冬  
關東飢大倉米每七年直小板一金自是連年穀不熟米價彌貴十



三年大倉米每六斗直小板一金乃下詔令酒家減釀本用不得過  
五分之一於是酒價彌貴而私釀彌多有司遣吏行都鄙酒家酒家  
皆匿私釀且賂吏以求免誅吏有致富者酒家亦多利云此文茲商  
の巢窟欲實を穿て良吏を以て洞然とて見やせむ貪  
吏茲商の殘忍古今皆一轍ふ出つ賢相循吏眼を拭ふてらるる○  
昔南龍公豫備倉を立させられ飢歲軍國の用ふ備へたまひ  
又國政棊盤積りとしり主法を立させられ常ふ御座右に  
くれて國用の出納を平し不足なうらゝ給ふ今ふ至りて民

う死無と申傳ふ○  
節儉を守られたるこのやうれをだ  
ふむておき國中の糶倉を立られ凶荒こそあへ民のうゑをま  
くもれしとぞ民を守るハ其身儉よあはざれば事行われずと  
銀臺遺事に見ゆ○  
明暦元年糶倉を立られ一が豊年打  
作らば故胤耗工府は減一宝曆の凶作は民を死せしむバ  
安永三年糶藏屋鋪を立られ明和八義倉安永五義倉を立られ  
一今日保七年壹俵四ノ八百文と  
う聞ゆ美政としりる翹楚篇に見ゆ○萬民を撫育して子



孫は天下を傳んと思はば夜々不工夫とて心の障有らば  
らばあはるる不淨世の狂言綺語は月日に移し我事は心は移し  
又茶の湯とりし事を高上結構あることと思ひ詩歌連歌を古  
の美事と事とあり侍の歎をよあはるる萬民餓死に及ぶと  
不聞也天道より是を見給はば天罰當座に當るる事なれ共  
天の徳廣大よよめて大悪人ハ一代まで七び小悪人ハ子孫に  
ぶ盗人の類斗りば悪人といふはよめども萬人を苦しむるもの  
を大悪人といふ也 本佐錄の經濟辨に云内堅固なる第一は道也

りて和し兵糧多かり外國のおそむる第一ハ弓馬兵法のたし  
あそふり士民共は達者まで武國の名は叶ふなり今の急務  
ハ兵糧多く貯あるふあり北狄唐土を取ら 本邦は来りし事  
度々なり今已に唐土を取らりよも来りハせざとあそふたの  
とハ武備不ゆらず今北狄来りあは彼と合戦まで及むと内  
虚はし人心散むる事あはる今諸侯一國の人数を出して  
其兵糧あはる事ハ二十侯より二侯もまれあはるべし大坂は出  
ししる賣米の残りハ皆國々へ戻るる其上は用銀あはるバ米

せ買ぶ一十日廿日の間ハ米ハ壹石銀百目二百目の賣買  
なり廿日三十日の間ハ四五百目とあらんあつて諸浪人  
諸町人民間の一日過のこの諸宗の坊主忽ち餓死及びん其  
時ハ世間さわぐぐ諸人ハ氣となり虚説の多けきハ無  
事の時此飢饉乃とと居あがら餓死する者ハ多くなつて  
と強盗と成り少きハ五十人百人多きハ五百人千人組で横  
行もぐ一軍法者歴々此浪人など大將を取立といふあり  
事成せんも計りごとく吉野熊野其外の山中の松ハ強力の者  
共にて幾千人もありなん彼等ハ材木を切て米とて食と  
む其時ハ材木を米と切あるものあるまづけきハ強盗と  
なりて國中ハ出んより外の事あつて昔ハ吉野を世のうき時  
のかくまぐといつり其時ハ諸國山林多くて吉野ハ松とて  
き故也今ハ第一居ぐとき所あらん今用銀持する人々の積り  
も違ふなり昔ハ農兵とて年貢とて其上米をひきて在々  
處々ハ米澤山あり一クハ金銀持の者ハ先々て扶持米と  
のほりたり今ハ在々處々ハ米とて國々も米をくちけきと

勢こそ多きやうなり其時米のたき事成驚く一たとひ少  
し米を求るとも百日に扶持方米とあてらるゝそのハ米高直  
て廿日おも足るまゝ先は北狄あり路次ハ飢餓里とありか  
くも進退きハまうらうとあまはづ下々ハぬけく小逃か  
つる一恥をたしひくもまもも馬の口取もあく鑊持具  
足持あく朝夕の飯とた水汲そのあく已と馬とばうりあり  
とも共より急て用お立つゝらばともりやて國より重て  
用意せんより外の事あらど五十人百人の走り人あはば了

法度も行とも一國の者の逃うらうらういかんともさる事  
かうらん彼ホも餘義あき道理もありあひく法を立んとせば  
國中一揆起り亂は乱はゆきぬア一旦ハ武命のあをきよ人  
數は出まるとも重てハ出ま事あさるゝそれよ又見らりきる人  
も有るゝ扶持米あり路銀ありといふも官あり貯あけきむ強  
く下知し給ふとくあふまゝといきより武威わろく成初てハ  
貯ある人もあつといひて出さば家人もあるつきは弊よの  
りて北狄大に侵む事あるへ若彼あう事を得どく引て

くろりくろりとも跡ハ戦國となるづきまに 公儀は向て敵とする  
人ハおくとも糧盡力盡く是非なく下知は志たがをどハ上よ  
りも下知し給ふ事不叶し諸國我々持の漸ある處其外い  
くやうに變あらんもあるべし此難を思ひ給ひ今無事  
此時備をなす給ふべき事也其時不當くハ張良孔明を師とせ  
とといひんともさる事おかしき強盗ともハ諸侯の兵此糧よ  
は手く働まきく死弊に乗要害此地をとる彼ハ盗人あきハ方  
方運送の米残あきく取民間を押領し却て富有よ成て勢はよ

く廣大はならば是よよめでいふやうに變あらんも知べし  
北狄来て騒動せば今此勢とハ格別相違し後悔し給ふとも  
甲斐あるまじし此編國は忠を盡し世を憂ふること深切とい  
ふへい飢歳は盜賊の起る事ハ周禮ある其備ありて何あから  
時君の失政ありあざむき手當より其災を消すへし只陸地の  
騒動恐るるまじし海上の運漕殊は多りれハ海上若賊  
多ふいたるハ陸地の防ぎより切くるを海岸の諸侯手當  
堅固ありて万一事ゆるは勦殲よすべし○救餓大意畧抄三十



年来御静謐せいせいひつよき豊年打續うちつづ吏民共とも餓死がしの事を忘れて其備そなへを  
したるといふ未然みぜんよき心ある人有ひととも世間の華はなと國用の  
費ひ公役の勤つとめ事不足こと不足明日飢き民みん有りとも其支度えたくも事不  
能できれ運うんを以見るふ天下一變てんじつして上下共とも大方一通り改り  
ぬき三十年一世の變へんにあつて見えり近年陽氣盛さかま  
して地力彫盡ちりくしょうじんぬ何き近ききりち飢饉ききんあるまじきものとも見  
えむ若一旦わがいつたんられあらば國君ハ三年の蓄たくわへもあきりどの方多  
く公家こうかよきもち續つづきたる市物入いちものいりよき國々の御貯米ごちよめ多  
有あべきやうあり無な之時節ときせつあれば多くの人民じんみんを飢餓きがせしめ  
目のぬきり殍死たみれはを見む事ハいづれもき事ことにあつてや今いまも  
其心付こころづて社倉しゃくらあつて其備そなへあらむ猶なほ間まにあつて事も  
らんされど夫ハ私領あせうの分ぶんを心儘こころのままあつて成なりべりれとも京大坂  
江戸町中の者ものハ此法このほうも行いひがてからんあつて農民のうじんハ社  
倉くらをなす町人まちびとハ時ときにたつて救法きうぼう有あつて社法しゃぼうも古法こぼうもな  
づいて本意ほんいを不知しらずハ不行いふのともなふべし必かならず其害がいあるべし指當さしあてり  
て財宝さいほう多く入いて難義なんぎあるべし上かみも少々の費ひをく下したにも少すくの



痛ぢくして一年不壹萬石の品も百石宛の社倉米出来る法  
あり志ある人の為の爲の切なる一飢民を救ふ法三十年前京師  
大に飢く死人ちあり小をり依之北野并東河原に夥しく  
小屋を煮て養たぬり仁心仁聞ありと云ふ了然  
れと目の前の了簡めて深く考へ給ふ暇なかりしを却  
て費のあらざり死人益多しと壹人の救にあらざりあり其  
子細と段々下に述侍るべし小屋を大にかくるふハ先二三日  
四五日出來せし其間餓死の者もとむ小屋の物入を米もく  
救はざ大勢たむるべし。○小屋場京の中にやならざれば必  
北野東河原辺なり飢民夫まて足をとらば其中行斃る者不  
知數たむハ僅に粥を得ても飢民遠路の往來にも腹を急て不  
得も同前なり是總して費したるなり京中一二箇所的小屋  
も京中の者をめつむる故夥しく推合く無力の飢民ハ堪る事  
不能く死にいたる者あり大勢の事なれば役人も多しね  
ハあらむとて役人小次郎惣名と云ふ者をすれば此飢民不  
ハ如何様のものあるべし難計殊小毛食小支配さすきハ無



禮の至りなり其中ふもゆゆり飢ぬ力ゆる者ハ老少并ニ力あ  
くよろか者の食は奪取騷動あり夫を制するとして捧をりち  
て打倒は依之痛をの夥しく却て不仁の事とある是見及ぶる  
事あり大勢の食あれを時尅きもぬざれとあふひして大方四  
ッ時ふ小屋のうちへ入く未明より来て寒氣夜氣はゆりた  
る者四ッ時まで待く飢死する者あり大勢にて吟味あらざれ  
ハ力ゆる者ハ二度も受ふ早く受ふ無力の飢人ハ押合ふえ不  
ひく遅く受ふ一度ハ全くハ不食たといひ今日受ふても明日うゑ

まゝ宿まゝ歸る事不能く野は臥して寒氣は中るその數を  
あらず野陣にて小屋はゆくれを雨風雪霜の時ハ不能くげ  
ども却て痛く死も惣して食を賜るとゆれば手前は少くッ  
も飢る者も止て貰ふ故に無用の所へ費る鍋釜桶等大分の物  
入多く右の外吟味をれば大分の費どもゆり然まば此は施行の  
害ハ多りれども利益見えれば右の害一ツもあく飢民はくく  
天命ハ不知壹入もころきど右の米千石の品ハ五百石を  
不用く役人もいらず救ふ良法を問ひ小屋をも不懸釜桶



の類も不用役人も不入飢民を出行シユンカウさせずして養ふ事ハ其町の者共へ渡さる云く否文イヘみてハ町人難儀イヘとて又其間ハ盜取シやある事も出来や代役人あぐの私も出来ぬ處シとてハ如何シとて救へきや曰くされバ其良法ありされども志あり人ハ語シきバ一座の咄イカは成て必其事行りさざるものなり外ハさぬくの邪シヤ出来やゆシ成て都て益あり故ハ其人ならでハ語るぬシき事也されども其法をある置備オキビするまシ夫を秘して自分の了簡シめてたゆ御心上オウジヤウにて御考への為一覽イワンゆるで飢饉イケンみてゆシら飢斃イヘる時ハ先第一京都をらば上下東西の乞食小屋并ナ織多村島原へ觸オスをたて乞食村シをハ乞食頭の者其村中の者飢シ及ふ者一人も外へ出すべくシ其内にシ一日ハ壹合シ一合半の粥を煮て養ふべし壹人シても其村より飢人を出し町中にて死シぬバ其頭ハ追放ツイハツたるべし夫乞食頭の者其次あり者も常々金銀をたくし居る事也頭より其次なる者へ割付ワキ相應オウイハ米壹石シ或ハ五斗シツシ出させて毎日其女房をシ煮させて及死類の者を

養ひむ穢多むら同前たる。島原の者あもくつりて揚屋お  
とて言て大分富たる者多し其富たる者ども其内の餓死に及  
ぶべき者粥を煮てくわせ壹人も外へ出さざらん若外に  
て島原の者として餓死する者ゆらだ尤追放たるべし一品より  
死罪あるべし乞食常々町中へ行く足たる方ありて貫ひ歩行  
者ハ其通りさあぐバ門は番をこえて一人も出なからむ是  
れ大分餓死の人塗中往來の害あるものあり崩盜の類も  
やむことのあり凡乞食の手ふ入たる金銀を二度外へ出る事

ありれば箇様の事ありて同類を養ひするも其者共の冥加の事  
也日頃町中に養ひて報恩ありやうの時盜賊の亂行を  
止め見苦敷者を道ふたれし多ぬ事も又至極の理也町中に  
とも室田町三條あどの繁昌の地とてハ如何様の飢饉よても  
餓死ふおとぶ者らやまきある然れば邊土第一ありさく町中に  
とも小屋くつり其日ぐつりの者邊土あど又其次あり北野辺  
清藏口寺町西院に波口東寺伏見海道粟田口あどの邊を見立  
貧人多き少き見立て其邊の寺或ハ三箇寺或ハ五箇寺町中に

てハ或ハ一箇寺ニ箇寺へ命じて其寺々の粥を煮てくそをよべ  
一寺僧も死を救ひ人成生以事ハ元来の役目あれハ得と合点  
させ其寺の釜桶を用ひて煮るのふる役人も外より不  
用して其寺の僧下人にすべしこれ等もまじく法有る法ら一  
箇寺ふ人数百人と心得て粥の米ハ精二升あるべし夫を一  
日兩度用ふべし先朝壹斗とのふ先寺の門をさして門の  
外に与次郎二三人程番よ付置て未明より粥を煮て少くさ  
桶のつみみも入る米を合屋の積り入の柄杓を多く持

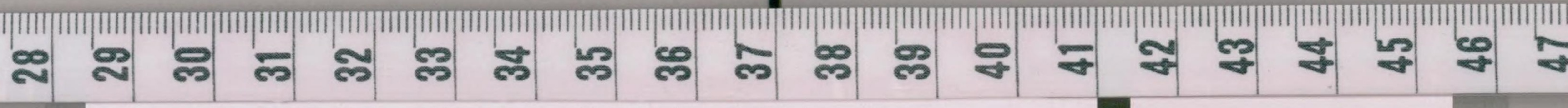
へく夫ハ一もいづつ汲て壹人づつ門をさし桶ふ施て斯の  
如く百人やぐれくも事ハ半時もくくらぬあり夫を汲てお  
てがふ者も其食を請る者の内を撰て二三人もわたりぐよ  
させその者ハ終よ一抄も與ふべし至極飢たる者よハ  
多くゆつふまじバ死むものあり用捨あるべし余り飢ぬ者ハ  
粥を汲まじ寺の僧りて下人あて一人のり居まじバ壹  
斗の粥を煮るハ飽る事也百人とゆへ粥盡時ハ門をさし最  
早いまじき粥を施す時ハ門外の与次郎ハ不及や寺のり



のそつみそとせよ切くせよと慮外ある言葉を出さるら  
ず乞食の分門とめて出ぬらハ 御公儀様より粥を託下  
間難有存ト戴うれしむ能さるべし先施さるべき日限を  
定て京中洛外海でふきをあし何の方角ハ何方の寺何方ハ  
何方と定て戴きこ来れ一日二合粥を下されハ間其心にて参  
りハ得とやべし然まバ一箇寺百人の積りにてハ五箇寺こそ  
五百人あり京中邊土八所して四千人あり夫程らあるべし如  
何あれむ乞食穢多村を苗故敷少あり其上町中に  
てハ其邊の寺有て又五十百も施をさるさうこつき合ぬを  
川也志うれを邊土にても五百人よりうハ有海でさて門の  
内へ入る晩がくや門さして不出不入を外にかせぎて  
三合もさふくる者ハ不來ま至極の飢人ら道を歩行くぬ也  
忍腹むら若雨風雪霜の凌ぐとき時ハ門の下鐘樓の下或ハ  
堂の内かよ小居て可凌是雨降あ行ゆる也或ハ草履を作  
り其外所作いあきんと欲する者ハ藁の類を持参りて寺のう  
ちふてあし事を救をありさて又晩方に及てま朝のうら



一々又壹合の粥を汲ぐ一人づつ與へ門を出さざれば然れを一  
日二合づつ粥を時節能喰へば飢死にあらず事也若し宿も  
あくて野に臥せる者ハ直に此寺のうち門の下堂の内ニ居ら  
ざるを病死す又ハ飢民の命盡て死する者ハ彼門を番を  
る乞食ニ命じて其寺の墓所ニ埋むべし然る者ハ一日ハ白米十  
石づつ也三十日養ふ三百兩あり凡飢死する程の事ハ二日斗  
にてハやむるの也然ればは何程もいらぬ成べしさて飢死ら  
一人もあまきをいあらざやさく金小屋などの物入をふきと  
見れむ先年の三ヶ一もいらぬをいふ若又夫を施すべきと  
あらば其物入を積り其半分ありとも彼寺々僧の骨折よと  
らせし乞食小屋をいふとらせしとよう教べし其上ハ如  
何様も成変ありこれ潤色する事ハ其人ハ有べしこれ大  
略をあらわす也さて又町中にて少し金銀ありてかやの時  
ニ寒夜あり粥を煮て為持出て施者ありされども人おびた  
しととり付て難義あることあれば仁心ある者ハ先をぬ勢  
に成てやむる事也これも上より觸を出して毎々飢の時にか



やうの支有より兼々上へも聞えられぬ又此度も左様心ざり  
ゆる者も有らんが必左様は施さすこと也 仰出ひよてハぢり  
れいも若存寄たる者有之も方々へりら出さ支ハさべうらぶ  
其所の飢民不振舞べー然まバ巴う宅の表庭まで得さすべー  
當町乃一丁より二丁ありカのおよぶりぐ与ふべーり夫  
もいづぐと思ふ者これあり是非施度思ふ者ハ面々の寺を  
頼もて成とも又ハ 公儀より社 仰出ひ寺の内へたのそて  
晝の食も得させ成ともいづべー左様の輩ハ寺々ふある  
置本寺へ届誰々々様の施を仕つると可申上本寺より又書付  
て 公儀へ可申上あり寺よそとさきと思は寺の難義や  
ぬ様よ人をささる左あぐは寺へその料を与ふべー如右寺を  
用ふる支當世の活法あり諺に曰禍も三年おけバ用立とを  
此類らさく又私よ人の餓死然らまて食むくも施さく思ふ  
ふハ廣く救りんも力及ふべきよあまぐあぐ郷黨ハまゝ相救  
の儀も有て其餓を見るふ忍さる事あり施さんとされを前よ  
もいづるどく餓人たうりて取付施も支不能のこぢらぐ都て

害出来ぬべしされむ我勢の及ふ程を救ふて費ある惠様あり  
これ私事あれは志有てあさんと思ふ人能々考へ  
行むる處。○此急救の立法寺を専ら用ひて粥廠ジウカセウの尤簡  
便あるべし和漢其説あり余も先づいひをり希賢實用の學  
以志たる人と見ゆ尤も志有て又社倉法略社倉法大意を著  
す識者撰ふ處。○本多能登守殿奥州白川在城の時三男越中  
守殿病氣少て甲子の湯へ入湯せられたりるに供して行た  
り醫者の旅宿へ召ふはういさきられが醫者他行して不來  
定めて傍輩の方におと在らんと傍輩の旅宿を尋ねむる  
よ見えむ養生の爲よ入湯せし醫者として供して來りてい  
づゝへ行たる哉人心得ぬ夏ありとて越中殿不興せり  
る所へや有て歸り來て参りたり汝ハいつくへ行たる哉  
らんと問ひきりればとちり半里をりりの村里に急病人有  
之を診て給へと願ひし間御とちりハ後不可や  
上と存先参りいとやけせば越中殿甚感づく汝夜前も久く  
夜詰し今日も早朝より我前詰居たりし者の僅の休息の間

不左様成心入奇特ありとて却て感悦せられさそ其病人とい  
うれり證と問りきられバ醫者答て病氣とハやつ畢竟飢不つ  
かれさ上ノ事あぐいとやけまバ越中殿は中りるハ當年の  
不作大殿さゆに可有之と豫々思召て奉行とハ不左御付  
御救の借一米出され一所ノ飢民有之支不心得とそせんぎあ  
りられバ奉行とも大分ノ借米を貧民少ら不借して富民不  
の借りもありそれハ如何も有られバ貧民ハ返納成がごと  
富民ハ返納滞りき故あり越中殿は救ふハ手まりハ

いとゆふりの也役人さゆの心得るハ外も飢民多かる  
度として惣役者との一兩日の糧を残りて餘ハ近邊の貧民  
小施一急は白川へやぎ米は取らせ自身下知して配分せ  
れりりるが猶も腹をさ急うして役人との志うて成思へ  
ハ湯治も面白くすよて僅小五六日にして白川へ歸り父公  
へ其由をさやられバ能登守殿役人を蟄居せしめられ一事あ  
り越中殿二十歳の時比支也父能登守殿異居成つて分別者  
とて愛子やうもあう二十餘歳とて早世せしむる猶



餘りあり下々の役人かくつぐき愚計あり○謂王置氏曰  
當年凶歉上々御仁政故餓死ハ一人も無之ハ得共新非人お不  
く出来由誠ニ餘義やま夏ふハ但新非人ハ上々力成そへ  
ざまバ本へ立歸りかてき者也其故ハ惣して新非人とちりハ  
ハ元來水飲百姓あていが飢こせまろ先家賊を賣着替を賣其  
後鋏鎌をり鍋釜を賣食てさく非人とちりハ故不旧へ立歸  
るがてくハ此所貴殿くく思慮有て旧へ立ちてるやうハ  
成りて是仁政且ハ水飲百姓おろくハ國の大利あてハ  
其故ハ鄉村ハ水飲百姓おろき時ハ傭工有之故耕耘の力  
く行こつた實のり豊饒ハ座ハ惣とて學文ハ國家を利益  
さる故主本とて後世一箇の心の沙汰のこハ周公孔子の學  
ふのこハ佛見の面成てたるものなり○井上河内守正利領  
分早魁とて畠枯百姓とも歎きくハ代官家老とも方へ訴  
訟せし時家老とも役人ハ以吟味を遂られ是非手當あてく  
叶ふ間敷其段可や上とて河内守耳こ入れバ民ハ國の本也  
重きとてあれバとて某直ふんむくハ如何迎供觸く町を



まへに出入り時芋の莖の早不枯たる一切が乗物の内へ入る城  
へ此歸是くハ悲しむも理なり大切の百姓飢させると叶ふ  
まじくとも其方共積て立ひ手當の金子千両五万石の高  
く増て早々せ早々を以へと言て入まけりとちり此度傳へ  
聞て百姓城へ向不拜との何れと○租不出る所の米萬一ハ  
うすむべ上の倉に入てあつらふの備とて民是故見て頭を  
あつらふゆとひそめて是故かあむ元より倉にたくなく  
不虞の天災救をんとて是人君の仁心すて有司られをそと

あふ故に民悲しむ也米粟倉不納てよりとをく有司倉をひ  
らきて點檢を其米粟黄腐あるハ虫鼠の残ふあへば種籩  
の木札をてて出る所の民よりあへて更に米粟をあさめ  
しむ千束の富猶その黄腐虫鼠の残をくむ況や懸磬之室を  
や千束の富く悪む所小民あんどなくや是人情を志  
らざるの甚しきとあり○毎年春に至て糶をりたり民の  
乞ふりのあはあへて志らざればあつらふ所の糶をり所は  
米黄腐くくろくをり或ハ赤米くく番掬をれば半く



くくく極る人君より是は察を爲す○國家大費の毎  
必黄金數万をして民より出さしむ一縣何幾戸何幾の數は以  
貧富の品々壹是は是に其内の多少厚薄ハ又摺吏の心に  
ありそれ小民も田租猶是をくくく況や場圃及ひ戸牖布帛  
の賦もや是のくくく人々賦し車馬酒茶推  
又翼年の租を出さしむ又ハ故に金銭を出さしむ乃  
類實くくくあや此外聚斂苛政猶あすふゆ海あざ  
るゆり人禍大概如此ゆて天地變災又時とくくく至て一  
早巳不甚しく田水忽こくれて稼禾らるが内上枯槁草色み  
を黄く變て爰於てハ金鼓をくくく大ふ雩を只農民の耆の  
む所の井もくくくは溪水をゆくひて田く導く溪水  
即日小涸まハ遠く江河の水を汲む老幼皆出く人毎に壺瓶を  
提て往反二三里くくく數斛の水を持これくくく  
事終らば忽尔涸る爰に至りて力窮たり唱々然くくく  
昊天を望み號呼悲泣して止む是昊天の苦くあり霖雨數日  
小晴されば農民の愁常く河水の溢るる在てこれ郊野に出



て土はもとむい堤梁の蟻穴をわきあふ終は河水蕩々として山  
をうき陵ののぼるは勢あり人々を堤上より集り大に叫りり  
て洪水はゆき水勢いよきさうんよく人力のさきよき  
尔あふ忽梁を破りて漲り来る其勢は盆の水は覆むるが如  
く河邊の家屋もぐちし漂流を老幼道にまよひ人々號呼して  
奔走し或は屋上より登り或は林樹を攀屋たぐひ樹拔れむ是  
れ同く魚鼈の腹に葬る幸よくて全きも食はき力窮むれば  
終は水中に墜り死む洪水數日おし引去きば萬頃一毛のた  
つらびもる支に父子皆相失ひたが溺死のまよきやうなる哉  
ららむのそ是水潦の苦しみあり或は凶年五穀のそらべ  
て人煙終は魚蝦螺蚌をとりて食ひはく時ハ又木皮草  
根をとり終は疾をたえ衰は曳て拐腹して呻吟を面ハ  
人色あくのつら鬼魅のそく氣息奄々して朝夕はたりの  
危うきまよき至る是饑饉の苦しみ也或は疾疫流行して戸々  
相死し家々相疾ひ一室をれ死して葬るの人多く子ハ父の側  
よき死し妻ハ夫の側よて死むかのれも又死むるは無人とむ





これ聚歛おくりあつまるの臣盗臣おとりにふ抑おさふ多おほくもるん也

○讚岐國の人

森長見著述の忘貝わすれがひといひし假名文なづなに見し其中心なごころに米價こめいの度ほどを載せし日本紀にっぽんぎふ 顕宗天皇二年歲比ととひ登稔のぼる百姓ひやくしやう殷富いんぷ稻いね一斛いっくわく銀錢一文いんせんいちもんトゆり又續日本紀つづにっぽんぎふ 元明天皇和同四年錢一文げんめいてんわどうしやうせんいちもんト米穀六舛こくむつむトゆり又三代實録さんだいじつろくに清和天皇貞觀八年二月大政官處分定左右京米一舛直錢四十文前二十文今加くわ十四文黑米三十文前十八文今加くわ十二文是歲穀價騰踊とんやう東西洋頭白米一斛七貫二百文黑米四貫百文由是增定京邑沽價かひとゆり又百鍊鈔ひやくれんせうふ

後堀河院寛喜二年六月二十四日甲申定米斛一貫文とゆり又太平記たいへいぎに元享元年復大旱またおほいと此年錢三百文このとしせんに以て粟一斗あわいに價とゆり又重編應仁記しやうへんおうえんぎに弘治三年五月廿三日こうちさんねんごごにじふさんにちより八月九日はつげつくにち迄天下大旱あめつちに今年金壹兩ことしあがりを以て米五斗こめごに交易かうぎと前代未聞ぜんだいみきこの度と記せり又秋齋閑語あきさいかんごに室町殿日記むろまちのゐりを引ひく文有ぶんあり曰いは御局衆おつがやひやくしやう半下衆切米二十石賣拂うりかへ可べし由よし社仰越やうえに此頃兵庫之賣買このころひらたけのうりかひ一斛六匁三分五厘いっくわくむつごぶんごりゅう之由吹田屋新左衛門ふいたやしんざゑもんの御得心おのりこころ可有あ之のとゆり又是ハ天文九年あまのふねの事あり又草蘆雜談くさあしざつだんを見れば古田兵部ふるたへいぶの米

を賣て請取ぬ出〜二十夕目〜付壹斛替ありとの文〜是ハ  
慶長四年卯年十五日兵部判とあり又太平記の評を見まバ楠  
ろ米を買ひ山門〜寄附〜軍餉も備ふ米一千二百餘石以黄  
金百兩〜買得られざるを記せり又三代實録〜貞觀九年  
四月辛卯東西始置常平所出官米而糶之米一升直新錢八文京  
邑之人來買者如雲是時穀價騰踊内外飢饉米一斛直新錢一  
千四百由是官糶以救俗弊と見へたり 橋春暉

○山王大權現 小田井大明神 西神小五穀豐熟祈禱文

惟天保七年歲丙申之や〜六月某日但馬國豊岡の刺史後五  
位下朝散大夫京極甲斐守源朝臣高行謹で染盛清酌白銀とこ  
む〜を具へ〜照ら〜西神小禱り奉る恭〜かりんみるふ  
わが祖宗豊岡〜主た〜已降允何世〜及〜高行不肖  
〜て代に繼民に治むるの職〜めれ〜土地卑濕〜て百  
川の會〜所ぢれば防水の〜力を盡せ〜洪水〜  
毎小堤潰へ破き穀物流れ失せ良田變〜沙石は岡〜る志  
ろの〜頃年頻りに〜る急〜凌くので〜





尔東都の邸ていさくをむく火災のくわらま不得止の費つぎめやうに  
て今ハ百姓救ふたすむきカもむく民のつうさたる甲斐もぢ一皆  
高行がつもこの出のうへの恥はぢあるべうべ抑高行不肖ふせう  
して國を治むるの器きのゆゑむ人ひとを擇まらむて國政を任むる眼まなこか  
く臣も不直ふちよくして政吏とぐうごう故ゆゑなるべう又ハ民小ころ  
所の年貢厚くして下の痛いたむむ願ねがふが海うみや又ハ遊興ゆうきやう耽たふり人  
夫を遣つかひ農時を妨さまたげ年のみのりのみりとがきやまへハ高行かの  
れれと思ひて臣おんの諫いさなを用ひずまとむむなるなるは用ひ善者を

退るや何なにとて夫災のくわく多くおほく民たみはくもめ給ふや民ハ罪  
ああ晝ひるハちかり夜よも繩なはひひ春耕はるまき一ひと隻ひと耨うめめののみ粒つぶ々皆  
辛苦しんくと出るでるる災わざりりを罪つとめ給ふやさはりは今ハ田舎も都みやこ  
ここののささりりああららむむああららむむ農高のうたかの業わざは懈おろそかかもああままばばををいい  
ままめ給ふにや若わかききやゆゆらんらんハ是も高行が政事せいじのめめき  
にて刻ときとと高行をを咎とがめ給ふたれれああと民ををばばくく先  
給たまへるや御神みかみををめめくく厚あつくく威い稜れいととにああららせせばばいいくくも  
ああのの民たみははああららむむ給たまふふむむききことことののりりああららむむふふぢぢい



たく災に下し給ふ今ハ民ホウ多クヤ死シをシ履キ田畑ヲ去リ人  
の國ヲヤリげスんハあれル也ハひもちキ高行ガ耻ノもチ々々  
む御神モりツつラ立セ給フのキ志ヲあラべテ高行今らリ  
食ハ味ハ重ねむレ一菜コのキぎリ衣服ハ寒サ凌ぐまデてハ綿服ヲ  
をマしムひとまシうハ風雨志のキまデてハ飭ヲせズ婦人ハ子孫  
に継たりテ色ニ耽らず欲もほどハひコキサあラる政吏ハ先  
知ル所ノ賢ヲ試ミてハ廣ク求メ免小過をいシテハ能ハ用ヒ忠心  
深キ事ノかぎりハまシりのあらうん事ノ擇ミてハ奉シ諛ふ  
之ノ言ハつくる事の人をシ秘シ之ノ退くべシされどもハ高行  
が不肖イまぐか道コのキぎリ心ノ及むんた  
け朝ハさく起テ政吏ハ勤免夜ハ遊ヒ時ハつままシ此言  
若しつらむ罪蒙リて立所ニ命失ひてん願くハ御神高行ガ  
不肖ヲ憐れ莫太のめぐもハ疲民ニ施シ給ヒ寒暖時ヲ失ハず  
五穀ノをシ洪水稀ニシてハ損失々々民飢寒ヲ免れんハ高行  
が願ヒられル過ス事ハ多クもマスハ  
○養草ニ曰ク老人曰近年米穀不熟ニ付價高直ふテ大ニ難儀小



たふぶゆふ粥は食をなまきり御觸有之ひ最貧窮人の自然  
と鹿食喰儉約を相守とりて富貴の人ハ御仁心の是為仰  
付自身家内は儉約の心と心得違ひ人ものゆるんが日々米穀  
乏く相あり當春ふつてつて高直よて遠國は餓死  
むるよ粗相聞へは當秋作熟かりとるよて十月あもか  
ふハ繁花の地とりて餓死の患へゆるりかて富貴の  
人も我身の為とりて貧窮は人の施行むるとたれハ諸方家  
家朝夕の食一たるとば一日ふ壹人の米壹合宛喰ひの  
むせは百人ふ壹斗万人と拾石百万人に千石一箇月ふ三万石  
十箇月ふ三十万石是は四斗入て七十五万俵なり遠國他郷  
あも聞傳へ幸ふ相守らば海内ふつてまきバ無量の石數たれを  
只此米はうま一粒も大切おせば貧窮の人は難に救ふ基  
ともあさんうとあまきくたれをたむ  
遠國の不作とてふひきうけてられ喰ひのをせす名ハ豊年  
鹿食をばきり下部分主人より米をのりて給銀はませ  
○此外飢饉さへくあまきと我等うまふ小人ハ是を知らむ



悦めれば一生の間悦通しと思ひ富貴あればいつまでも富貴  
と思ひ若しきばかりつまでも若しと思ひ息ぢなればいつつこ  
も達者ありと思ひ豊年ちよばかりつとも月夜に米の食と思ふ心  
の油断く多少の高低こびつとも五拾匁の米が百目に成  
ると世界中で我たつて壹人が飢饉こめひいやうふおりのく  
ろろたへ常の心ばうしやふこそおろくちよきめまでくも日輪  
こそさへ蝕のきまんゆを月も雲のきまんあり聖人の道こそさへ  
異端とりしきまんあり佛ふ外道のきまんあり生きば死る  
のきまんあり満きばかりのきまんゆを樂とあきば又く  
しそのきまんゆり悦びあればかぢしみのきまんゆり家も前つ  
きまんあり國の賊はきまんゆを人々の病のきまんあり常心  
あきば人心とふきまんゆり富貴に貪乃きまん有此諸々の  
きまんゆ知り一切のぞとぢやめ十分の福がひを守て遠き  
慮をめぐらし手近きところの足事を知り常豊年でく給へ  
○貝原樂軒曰又ある所々領主より飢人一日一人に付て米一  
合或ハ一合餘も救米を与へられしが夫こそて餓死のりのあ

是故以て思へむ飢饉の兆見へたるは民の惣司たる人其下  
此役人<sup>わらわら</sup>懇<sup>ねん</sup>ふ<sup>ひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>含<sup>く</sup>め春のき<sup>ん</sup>ん<sup>ん</sup>餓死<sup>くわ</sup>及<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>事<sup>じ</sup>は小児<sup>せう</sup>の  
物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>申<sup>ま</sup>り<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>細<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>小民<sup>せう</sup>ふ<sup>ふ</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>飢<sup>く</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>秋<sup>あき</sup>一<sup>いっ</sup>日<sup>にっ</sup>は食<sup>く</sup>  
物<sup>もの</sup>は<sup>は</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>難<sup>なん</sup>義<sup>ぎ</sup>の時<sup>とき</sup>は<sup>は</sup>五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>日<sup>にっ</sup>も<sup>も</sup>食<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>小民<sup>せう</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>と  
先<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>は<sup>は</sup>思<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>秋<sup>あき</sup>は<sup>は</sup>食<sup>く</sup>物<sup>ぶつ</sup>一<sup>いっ</sup>日<sup>にっ</sup>乃<sup>の</sup>  
今<sup>いま</sup>は<sup>は</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にっ</sup>小<sup>せう</sup>用<sup>よう</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>少<sup>せう</sup>も<sup>も</sup>苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>秋<sup>あき</sup>一<sup>いっ</sup>日<sup>にっ</sup>食<sup>く</sup>ふ  
食<sup>く</sup>は<sup>は</sup>春<sup>はる</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>ん<sup>ん</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>は<sup>は</sup>適<sup>た</sup>る<sup>る</sup>た<sup>た</sup>免<sup>めん</sup>く<sup>く</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にっ</sup>半<sup>はん</sup>程<sup>りやう</sup>と<sup>と</sup>食<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>合<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>是  
ハ<sup>は</sup>菜<sup>さい</sup>大<sup>だい</sup>根<sup>こん</sup>万<sup>まん</sup>の<sup>の</sup>摘<sup>つ</sup>菜<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>加<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>遠<sup>えん</sup>國<sup>こく</sup>ハ<sup>は</sup>所<sup>しよ</sup>こ<sup>こ</sup>より  
農<sup>のう</sup>人<sup>にん</sup>一<sup>いっ</sup>日<sup>にっ</sup>の<sup>の</sup>糧<sup>りやう</sup>と<sup>と</sup>白<sup>はく</sup>米<sup>まい</sup>一<sup>いっ</sup>升<sup>しやう</sup>餘<sup>り</sup>も<sup>も</sup>食<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>所<sup>しよ</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>七<sup>しち</sup>合<sup>あ</sup>充<sup>ちやう</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>り  
に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>二<sup>に</sup>箇<sup>こ</sup>月<sup>げつ</sup>ハ<sup>は</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>二<sup>に</sup>斗<sup>と</sup>餘<sup>り</sup>の<sup>の</sup>糧<sup>りやう</sup>米<sup>まい</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>り<sup>り</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>月<sup>げつ</sup>ま<sup>ま</sup>で  
も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>ば<sup>ば</sup>三<sup>さん</sup>斗<sup>と</sup>餘<sup>り</sup>の<sup>の</sup>米<sup>まい</sup>を<sup>を</sup>得<sup>え</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>右<sup>みぎ</sup>ふ<sup>ふ</sup>云<sup>い</sup>一<sup>いっ</sup>日  
こ<sup>こ</sup>一<sup>いっ</sup>合<sup>あ</sup>餘<sup>り</sup>の<sup>の</sup>飯<sup>いひ</sup>米<sup>まい</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひゃく</sup>日<sup>にっ</sup>許<sup>り</sup>は<sup>は</sup>飯<sup>いひ</sup>米<sup>まい</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>もの<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>り  
若<sup>わ</sup>又<sup>また</sup>初<sup>しよ</sup>秋<sup>しゆ</sup>の<sup>の</sup>序<sup>しよ</sup>り<sup>り</sup>ち<sup>ち</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>ひ<sup>ひ</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>は<sup>は</sup>此<sup>こ</sup>今<sup>いま</sup>が<sup>が</sup>儉  
約<sup>けん</sup>と<sup>と</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>家<sup>け</sup>内<sup>ない</sup>五<sup>ご</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup>七<sup>しち</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>家<sup>け</sup>と<sup>と</sup>畜<sup>ちく</sup>へ<sup>へ</sup>たら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>大<sup>だい</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>穀<sup>こく</sup>  
物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>得<sup>え</sup>る<sup>る</sup>事<sup>じ</sup>は<sup>は</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>一<sup>いっ</sup>升<sup>しやう</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>覺<sup>かく</sup>悟<sup>ぶ</sup>ハ<sup>は</sup>農<sup>のう</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>近<sup>ぢき</sup>き<sup>き</sup>役<sup>やく</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>納<sup>なつ</sup>  
得<sup>え</sup>る<sup>る</sup>食<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>民<sup>みん</sup>を<sup>を</sup>治<sup>ち</sup>めん<sup>めん</sup>と<sup>と</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>農<sup>のう</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup>得<sup>え</sup>る<sup>る</sup>心<sup>こころ</sup>と<sup>と</sup>



特 7  
690

や早田の時よりかゝく慎み食物と菜や芥やぐをごとくき物に  
加へて春の飢を恐るゝ夏深くはいつ程凶年なりとも麥むぎのま  
へに餓死するものあるべうらぎ只是未すゑの役人此事を能會得  
偏ひとに妻子扱さるゝとぞとく眞實まことの心を用ひて云聞さるにめ  
るのみ



国立国会図書館

タイトル『救荒便覧』 請求記号 特7-690

ガラス使用